

☆☆ 26年度 新任事務長の想い ☆☆

今年度の10名の新任事務長に、正直な想いを綴ってもらっています。今回は、4名分の掲載となります。それぞれの覚悟であったり、迷いであったり、個人のことより他を思いやる、人としての思いが伝わってきます。

管理職事務長として大きく成長するための大切な1年目です。大いに悩み、大いにビジョンを語りましょう。より良い学校教育及び若手事務職員のためにも、私たちは、従来の意識を改革し、大きな壁を乗り越えなければならないと考えています。「我々の改革は必ずいい方向へ向いている」私は、そのように確信しています。覚悟を決めて、ともに頑張りましょう。決して折れない強い心で粘り強く・・・

佐賀県公立小中学校事務長会 会長 古川 治

~~~~杵西地域 武雄市第2学校運営支援室長 廣川 富夫（御船が丘小 事務長）~~~~

武雄市第2学校運営支援室の室長となり4ヶ月が経過しました。今回は異動もあり、また今年2月からのファイル授受システムもうまく稼働していない中、事務職員用パソコン WinXP が4月初旬に引き上げられ、ようやく Win8 が4月末に貸与されました。専用のパソコンが無い状態が20日間続き、今日の学校事務はパソコンが無いと仕事が全く出来ないことを痛感しました。7月に入り、ようやく落ち着いて仕事ができる状態になってきつつあります。



武雄市第2学校運営支援室は御船が丘小・東川登小・西川登小・橘小・川登中学校の5校6名で活動を行っています。事務長1名 事務主幹1名 主査2名 主事2名で構成されています。支援室の活動は月2回が基本で、繁忙期（予算・年末調整・異動時期）は、3～4回を計画しています。定例の月2回の支援室会議の内1回は、各学校のファイル授受システムの審査を主に行い、月の中旬に開催する支援室会議では県費事務や市費事務の業務の確認や問題点や課題点があれば持ち寄り研鑽するように努めています。

今年度の重点目標は、若手事務職員の人材育成、職位や経験年数に応じた判断業務の研修、武雄市独自の先進的な教育活動への学校事務職員の参画を掲げています。若手事務職員の育成については、具体的に言えば同じ市内で学校事務職員が行っている業務に微妙に異なっているケースがあります。もちろん主事と事務主幹・事務長では経験年数も違うので当然そのようなケースも生じてくるとは思いますが、職場において教員の方々が困惑するような違いはあってはならないと考えています。様々な業務のなかで、身の回りの些細な業務から学校経営参画に至るまで考えさせ、学校事務職員のスタンスの取り方や判断業務などにレベルアップを図る計画を立てています。

職位に応じた研修では、特に主査の事務職員に支援室内で積極的に各種業務の



リーダーになってもらい、ファイル授受システムの分かりやすいマニュアル作りや学校備品購入に係る計画書作成など効率的な業務活動推進や課題解決の研修を実践しています。各種業務の中心的な役割を経験することで学校や支援室を管理する能力が醸成され、次のステージアップへ移行できる力量を培って欲しいと考えています。

最後に、今年度に入り全国から注目されている武雄市で、事務職員がどのような役割を果たせるかが課題です。“小学生全児童へのタブレット配布”・“官民一体学校の「花まる学習」”・“武雄寺子屋”・“小学校1年生のプログラミング学習”等、教育情報誌や新聞報道などで武雄市の教育活動は、頻繁に紙面を飾っています。今後そのような教育活動に私たち学校事務職員も、積極的に関わっていかねばと考えています。学校事務職員だから見えること、出来ることがあるはずですが、現在は、特にこのような教育活動には関わっていませんが、(関わらせてもらっていないというのが実情ですが) いつでも参加することが出来る体制を整えておく必要があると思っています。

今後の学校事務職員は、教育現場で多岐にわたる業務や活動・教育支援を行わなければなりません。目に見えますます多忙になるとは思いますが、「ピンチはチャンスの裏返し」と言い聞かせ、支援室全員で考えながら、大きな成果のみを追うのではなく、一歩ずつ確実な前進を目指し頑張っていこうと思っています。

~~~~佐城地域 中部地区城北学校運営支援室長 深川 英典 (高木瀬小 事務長) ~~~~

事務長として赴任し3月が経過しました。同じ支援室内からの横滑りということで、過度の緊張感は無かったものの、事務室スタッフの総入れ替えと、それぞれの職務内容に対する未経験が重なり、4月の船出は困難を極めたものとなりました。

5月上旬に2校の県監査に立会い、10回を超える出張をこなしながら、6月中旬には、5年に一度の市監査委員会事務局監査を2年続けて受ける事となり、7月に入りやっと目を内側に向ける事が出来るようになったと思うまもなく、管理棟の大規模改修に向けた打ち合わせ等、じっくり腰を落ち着けての業務環境などまだまだ先のように思われます。

さて、私の目指す事務長とは、それぞれの学校組織における室員のあるべき姿と共同実施組織における室員のあるべき姿を常に念頭に置いて行動する人です。学校組織におけるあるべき姿とは、職員に信頼される事務職員になる事です。



正確で迅速な事務処理能力を發揮し、学校運営に積極的な関与を示し、危機管理能力に優れ、教育目標実現に向け教員と協働して、子供の育ちを支援する事務職員のことです。

共同実施組織における事務職員のあるべき姿とは、室長の組織目標を理解し、室員同士の信頼関係と有効な協働関係を保ちながら、支援室内の課題解決に、組織の一員として積極的に係る事務職員のことです。事務長として必要な事は、支援室内学校における均質・均等化の取組です。学校の均質とは、学校の管理運営面における方法の統一です。

学校は、県と市の監査が、複数年ごとに行われます。この監査機能を共同実施に付与し、毎年全学校を対象とすることで、学校の均質化は格段に進むものと思われます。

**正確で
迅速**



組織マネジメント

次に、業務の平準化の問題です。学校は規模の大小、経験年数の深浅により、業務内容に大きな違いが生じます。事務長はそれらを考慮し、複数のチームを作り、兼務辞令を最大限利用し、互いの学校を常時サポートする体制を作ります。これにより若年層や転入者の単独配置による不安や、大規模校の多忙感も薄れるものと思われます。また、会場校の輪番制を採り入れ、当該事務職員の日常業務に係る自己開示と書類を具体的に見て全員で批評と評価を加える活動は、学校卒の意識を取り払い、共同実施の理念とする室員の一体感の醸成と業務拡大や質の向上に、寄与するものと思われます。

最後に事務長は、組織と個人の役割を常に考え、ビジョンを明確に示し、室員のセルフマネジメントを信頼し、組織マネジメントの展開による教育支援を行うことで、より良き学校運営が保障されるものと思われます。

~~~~~三神地域 みやき町学校運営支援室長 権藤 康裕 (中原中 事務長) ~~~~~

佐賀県の事務長制度が発足して4年目になりましたが、過去3年間は事務長への興味も関心も一切ありませんでした。そんな自分が今回なぜ事務長試験を受験したかについて書きたいと思います。

ここ数年間で、事務職員の業務が大きく変わりました。学年会計、給食会計、PTA会計、教科書事務など、10年前の事務職員にはあまり見られなかった光景です。先生方の負担軽減という意味ではよいことだと思いますが、一方で事務職員の負担は急激に増大しています。多くの事務職員は個々の業務にじっくりと取り組む余裕はなく、裁量権のない業務を黙々とこなし精神的・肉体的に疲れ果てている事務職員も多く見かけるようになりました。



昨年、事務職員のこんな言葉を聞きました。「仕事が忙しすぎるので、病気になった方がましだ。」また、別の事務職員は「仕事が忙しすぎるので、生徒のことはかまっていられない。校内で困っている生徒を見かけても素通りするだろう。」と言っていました。

共同実施が始まる以前は、このような言葉を聞いたことは一度もありませんでした。共同実施が始まって以降、さらに事務長制度が発足して以降、事務職員の仕事の在り方が大きく変わり、事務職員が高い評価を受けるようになった反面で、精神的・肉体的に追い詰められている事務職員が増えてきているという現実があります。このような状況を目のあたりにして、事務職員の地位向上・確立のために、これ以上業務を増やしていったらどうなるのだろうかという不安でいっぱいになりました。

家庭も趣味も充実していてこそよりよい仕事ができると思っています。教員と違って、普段の仕事では達成感や充実感がなかなか味わえない事務職員にとっては、尚更だと思っています。家庭や趣味が充実することでエネルギーが充電され、そのエネルギーが仕事に発揮されると確信しています。それなのに、毎日達成感を感じられないルーティンワークで遅くまで残業してはよい仕事ができるはずがありません。そこで、せめて自分がいる支援室内だけでも、事務職員全員が元気で生き生きと仕事ができる環境を作ってあげたいと思い事務長になりました。これから先は、裁量権のない仕事を引き受けるのではなく、やりがいのある仕事を模索していきたいと考えています。

このような私の考えは、現在の事務長会の思いとは一致しないのではないかと思います。しかし、誰よりも回りの事務職員の心と体の健康を一番に考えている自信はあります。私は管理職になりたいとか、名簿の3番目に名前を載せたいとか、そんな思いは一切ありませんでしたし、それが事務長試験を受験した理由ではないと断言します。

心も体も健康で生き生きと仕事ができる事務職員の環境づくりをするために事務長になりましたので、もしこのような私の意志が貫徹できず感じたときは、降格を願い出たいと思っています。

~~~~~三神地域 神崎市南部学校運営支援室長 吉田 奈子（神埼小 事務長）~~~~~

「行政を希望していたのなら受け直した方がいいよ。」——学校という職場を希望して「学校事務」を受験した二十数年前、系統だった研修もなく管理職になることもなく一般職としての学校事務職員で退職することが普通だった時代に、当時の先輩事務職員の方が赴任してきた私にかけてくださった言葉でした。その頃は、実際に同じ年度に採用になった事務職員で、翌年度、行政を再受験する人もいました。だから平成24年度の試験から採用区分の一元化になる事やその流れを聞いた時は、正直言って今から採用になる人を羨ましく思いました。それは学校事務が嫌だということではなく、体系的な研修が用意され、また学校だけでなく様々な課の経験を積むことができ、そして自分が生かせる職場を選択することができる事に対してです。ただ漠然と異動するのではなく、キャリアアップを実践できる構造の中に最初から入れるからです。



今は新規採用や臨時的任用の職員、知事部局・県立高校との人事交流の職員を受け入れる立場になりますが、学校教育の現場で教育行政職員としての力を確実につけていけるように育成しなければならないと思っています。教育というものはすぐに成果が表れるわけではなく、積み重ねが大事です。「三つ子の魂百まで」や「鉄は熱いうちに打て」ということわざのように何でも最初が肝心だと思います。学校現場のことを知らない職員を「育てる」楽しみもありますが、反面その責任の重大さも感じていました。

事務長の採用試験以降、不安と期待の中、緊張しながらこのような事を考えていました。幸い一緒に勤務するようになった相棒の方は、経験年数も私とほぼ変わらないベテランの主査の方でした。ジェネレーションギャップから来る問題はなく、正直ホッとしました。それでも地教委を異にしての異動なので、財務処理や学校運営・共同実施の事で戸惑うことも多々ありました。何度となく前の支援室長の顔が思い浮かび、今でも自問自答しながら進めています。あれこれ変更すると混乱を招くので少しずつ変えています。周りからは良くも悪くも様々な反応が返ってきます。しかし、時間が経つと自分の感覚が今の職場に慣れてしまっただけで「普通」になってしまいます。特に、施設の危機管理については、対応できるものはすぐ行い、時間がかかるものは校長や地教委へ連絡するように努めてきました。

4月からの忙しい時期にいろいろ変えてきましたが、相棒の方は文句も言わずについてきてもらい本当に感謝していますし、人に恵まれたと思っています。最終的には誰が事務長として来ても、また事務職員として来てもスムーズに行っていけるような体制（PC環境も含めて）を支援室内に確立していこうと考えています。事務長の異動



つなぐ

サイクルは2～3年、事務職員は4年なので、少なくとも赴任した職員が、ファイルの場所や文書等を探すことで、時間を浪費なくしていいようにしたいと思います。

今後、学校事務の職務内容は世の中の変化に応じて今以上に変わることが予想されます。プレイングマネージャーとして、日々走りながら考えて、悩みながら他の事務長さん方に付いて行っているのが現状です。何より室員が、去年より少しでも成長してくれる事を願って奮闘しています。